

## 編集後記

『社会と倫理』第32号では、特集として4本の論考、論説として3本の論考を収録した。

特集「運・倫理・政治」では、誰もが日々の暮らしや人生の重要な局面において逃れがたくその影響を受ける「運」なるものについて、倫理と政治という文脈から哲学的に迫ろうとしている。古田徹也氏の論考は、現代英米倫理学のなかで運と道徳・倫理がどのように論じられてきたかを丁寧に整理し、運というものがもつその扱い難さを示すことで、倫理学という営みのもつ業のようなものを明るみに出す。近藤智彦氏の論考は、古代のテキストと現代のテキストを往復することで、運の問題についての人間の思考の長き歩みを浮かび上がらせる。いずれも、運を前にままならぬ人生を歩む私たちが抱えている「割り切れなさ」の根っこを学術的に抉り出そうと試みる意欲的な論考である。他方で、運に左右されてもされなくても私たちは誰かとともに、より適切な仕方でも暮らしていかなければならない。井上彰氏の論考は、自分ではどうにもならない自然的運の影響を除外することこそが正しい社会の根幹であるとする運の平等論の可能性を、運とは独立に社会関係をベースに平等論を展開すべきだとする見解との論争を軸に、探究する。その先に見えるのは、「平等主義のエートス」という新たな規範の受け入れを人々に要請すること、あるいは、人間社会の一般的事実という経験的な事柄に委ねること、そのいずれが正義を成立させる文脈としてふさわしいのか、という正義の原理的な問いである。それに対し、眞嶋俊造氏の論考は、命のやりとりが不可避免的に含まれるがゆえに運の影響力の大きさが際立つ戦争での戦闘行為をめぐる運と倫理の問題について論じている。運を前に如何ともし難いという厳然たる事実は、〈それでもなお「より少ない悪」を選ぶべきだ〉という倫理的な指針を私たちに要請する。眞嶋氏は、軍事専門職に対する倫理教育のなかに、そうした要請に応ずる可能性を見出す。教育もまた、運の影響を可能な限り排除しようとする営みであり、「平等主義のエートス」の要請とも併せて考えると、教育と政治をめぐる運の問題という

新たな課題が見えてくる。本特集の論考はいずれも、〈いかによく生きるか〉という問いに直接的に関連しており、その意味では、前号の特集「幸福論の諸相」の続編と位置づけることもできるだろう。

論説では、自殺に関する哲学的論考、および、人間の尊厳に関する政治哲学的論考を収録した。特集としては括られていないものの、前号の特集「自殺対策をめぐる政策・実践・研究」からの流れを組む小特集として読むことも可能である。蝶名林亮氏の論考では、自殺の道徳的価値をめぐる従来の議論の批判的サーベイが試みられ、論証のタイプ別に分類したうえで今後研究するに値する議論はどのようなものかを明確にしている。有馬斉氏の論考では、安楽死や自殺補助に関する自己決定至上型の容認論が抱える議論内在的な問題点を丁寧に炙り出し、自死に関して他者が容認するために自己決定の常時優先を論拠とすることはありえないと結論している。また、菊池理夫氏の論考では、古今東西に類似した概念が存在する広義の「人間の尊厳」の様々な断面が、政治学における「共通善」との位置関係を軸に提示されており、自死をめぐる自由や権利を支える基本思想としても多くの示唆が与えられるだろう。

そして、本号には、11本の書評が収録されている。前号から引き続き、自然法思想、メタ倫理学における自然主義、科学技術政策論、人道主義をめぐる国際政治、移民問題、道徳心理学の試み、出産育児の歴史、死生の問題、学術出版の問題など、多様なトピックに関する図書が書評対象となっている。本号の見所としては、自然法思想に関する本格的な研究書の書評を弁護士の米倉正実氏が執筆し、それに対して著者の山田秀氏が応答していること、名古屋大学出版会編集者の橘宗吾氏の著書に対して、さいはて社（元・大隅書店）の大隅直人氏が書評を寄せていることである。お楽しみいただきたい。

閉塞と排外主義が頭をもたげ始めたように見える世相のなかで、私たちの生き方に関わる様々な問題について適切に議論が進められることが期待される。本誌がその一助となるよう願う。

森山花鈴・奥田太郎